別府女学院設置の意義

今　井　　航　　吉　岡　義　信

【要　　旨】

別府女学院は各種学校であった。その設置認可は昭和21年５月１日に下りた。その教員らの中には、その後もずっと講義をしていた者がいた。そこには、終戦後の「種々雑多」な「乙女等」が方々より集まった。「現在の北石垣の地」も「資産及備品」も教員も「生徒」も、別府女子専門学校へと受け継がれていた。別府女学院の設置は、創設者佐藤が本来「發足ヲ企図」した別府女子専門学校の誕生を叶えるものであったと考えられる。

【キーワード】

佐藤義詮　別府女学院　各種学校　別府女子専門学校　「大学への出発」前

はじめに

創設者の佐藤義詮（1906～1987年、以下では創設者佐藤と略す）は、『別府大学の三十年』（以下では『三十年』と略す）の冒頭に「三十年の回顧」を寄せている[(1)]。

> 別府鶴見園の地に別府女子専門学校（発足当時の名称は別府女学院）の設立を思いたったのは、終戦直後の昭和二十年であった。最初に用地としては別府中学校の焼跡六〇〇〇坪で、この払下げを申請したところ許可があった。ところが間もなく通貨の封鎖が行われて市に払込む三十万円の捻出が困難になった。それで代替地を方々に求めて結局当時の別府市長末松偕一郎氏の斡旋で、現在の明星学園（引用者注―現在の明豊中学・高等学校）のあるところが元の満鉄療養所であってそこにきめた。しかしすぐそこに移る手続きが出来なかったのは何故だか記憶にないが、閉鎖機関などいう役所が出来て、在外資産の凍結が起ったからかも知れない。結局落着いたのが鶴見園であった。この間いろいろと助言もし協力をして貰ったのが、当時のCICの隊長エスポジット中尉であった。中尉と私とが知りあったのは大分にあったカトリック教会の神父マリオ、マレガー博士の紹介である。神父の教会を戦時中閉鎖することになりその建物の管理を引受けたのであり、当時いたもう一人の神父ヒグラーさんの身柄など引受けていたからである。
>
> （中略）
>
> 鶴見園の借入にもいろいろの難関があったが、成功したのはエスポジットの助言であった。
>
> （中略）
>
> 鶴見園での開校が五月一日で、それから二週間位は授業が続けられたけれど新しく別府に

占領軍の駐屯がきまって、その土地を追いたてられる羽目になった。学生は大分の学校で入学を定めていた生徒（国・英・社会科）それに大分の豊州高等女学校に別府から通っていた生徒が二百名位授業を始めていたが又移転の騒動である。それからの移転先を見つけるのは鶴見園を接収した責任があったので、今度は大分の軍政部の協力で現在の北石垣の地に最終的に移ることになった。
（後略）

本研究は、この冒頭にある「別府女学院」に光を当てる。

別府女学院は、1946（昭和21）年５月に開校した。現在の大分県別府市北石垣の地に移るまでの間に、用地は「別府中学校の焼跡」「元の満鉄療養所」と候補地を変え、ようやく「鶴見園」に落ち着いた。開校式が行なわれたのは「鶴見園」であった。しかし「新しく別府に占領軍の駐屯がきまって、その土地を追いたてられる羽目」となり「大分の軍政部の協力で現在の北石垣の地に」移った。用地が転々としたことが分かる。また、「当時のCICの隊長エスポジット中尉」の助言・協力が、開校式の行なわれた「鶴見園の借入」成功を導いたことも分かる。こうした現在地に移るまでの経緯やエスポジット中尉の果たした役割は、やはり創設者佐藤によって『学校法人佐藤学園の八十年史』（以下では『八十年史』と略す）においても明らかにされている[(2)]。

ここで、別府大学に関する先行研究へと目をやり、なかでも別府女学院にまつわるものに着目する。建学の精神「真理はわれらを自由にする」という言葉の出典に肉薄し、その意味を捉えようとする創設者佐藤の三男であり別府大学名誉教授の佐藤瑠威による研究や[(3)]、創設者佐藤の母校である文化学院とのつながりを見ようとする同名誉教授の山本晴樹による研究[(4)]、さらには同大学のバックルやバッジに見られるデザインの移り変わりを詳細に分析することで別府女学院時代のものの意味まで明らかにしている同名誉教授の仲嶺真信による研究や[(5)]、同大学の文化祭である石垣祭の開催回数からその第１回は別府女学院のクリスマス文化祭に辿り着けることを明かしている拙著などを挙げることができる[(6)]。

この他、その開校式の様子も窺える。『別府大学開学ものがたり』（以下では『ものがたり』と略す）では、その記念写真を掲載するだけではなく、参列者の一部を特定さえしている[(7)]。同写真は、別府大学佐藤義詮記念館（新18号館）に入って右側の壁面にも掲げられている。また、別府女学院には文芸部があって開校５か月後の1946（昭和21）年10月に『あかでみあ』が創刊されていたことも知られている[(8)]。さらには、当時を知る教職員や卒業生による回顧が残されており、そうした回顧からも別府女学院の色々な様子が窺える。

このように、別府女学院の様子は『三十年』『八十年史』『ものがたり』をはじめとする関係の諸資料や先行研究によって明らかにされている諸点から窺い知ることができる。しかしながら、疑問点や不明な点がないわけではない。

例えば、『三十年』では、同６頁に「別府女子専門学校の発足は、二十一年五月一日の開校にあるが」とある一方で、同12頁には「翌二十二年三月、専門学校令によって、別府女学院を別府女子専門学校と称することが」とあり、また一方で同付録の年表を見ると1946（昭和21）年４月に「別府女子専門学校（英文科・国文科・経済科）設立」とある。また、『八十年史』では、同82頁に「別府女学院（別府女子専門学校の前身）の開校は、二一年五月一日」とある一方で、同85頁には「二一年五月一日に開学した別府女専は、社会科・国文科・英文科で構成され」とある。さらに、『ものがたり』では、同１頁に「終戦直後の一九四六年に別府女専（一年目は別府女学院、二年目から正式に別府女専）を創立するとき」とある一方で、同32頁には「別府女専は、一年目は各種学校（別府女学院）として出発し、翌年正式に文部省に認可された女子専門学校に昇格」

とある。

いったい別府女学院は、どういった種類の学校なのか。当時の専門学校令による専門学校なのか。それとも各種学校なのか。上で見たような関係の記述からは、早速こうした疑問が浮かんでくる。また、そこには、英文科・国文科の他、経済科が置かれたのか。それとも経済科ではなく社会科が置かれたのか。こうした点も判断に迷う。

本稿は、大分県公文書館所蔵の別府女学院設置の申請・認可に関する資料により、そうした問題点に答えようとするものである。同時に他にも、その位置変更の認可・廃校届に関する資料も見つかったことから、先に触れた「現在地に移るまでの経緯」や別府女学院の終わり等の通説を補強することにもなるであろう。

さらには、その設置申請書には「初年度教授予定表」が添えられていたので、この際、同表を手がかりに別府女学院で講義をしたと見られる教員らを試しに特定する。その際には、該教員や別府女学院入学者と判断できる卒業生らの回顧類などを参考にする。当時の教員や入学者のことまで本格的に検討し整理しようとするのは初めてである。これまで以上に別府女学院の実態へ接近することにもなるであろう。

こうして、佐藤義詮の創設した別府女学院に焦点を当てて、この学校の性格を明らかにし、その実態に迫ることで、別府女学院が設置されたことの持つ意義を考えようとするものである。

本稿では、ここまでに取り上げた『三十年』『八十年史』『ものがたり』や、大分県公文書館所蔵の関係資料の他にも、『別府大学学長佐藤義詮先生　古稀記念論集』や、『佐藤義詮先生七回忌記念文集』（以下では『七回忌記念』と略す）、あるいは『佐藤義詮先生十回忌記念　真理と自由』（以下では『十回忌記念』と略す）等を参考にした。同時に、共著者の吉岡義信が調査を進めている「別府女専関係人名」に拠った(9)。

一　別府女学院の設置申請・認可・位置変更・廃校

創設者佐藤は、大分県知事に別府女学院の設置認可を申請した。以下は、その設置理由書である(10)。

> 大分縣下ニハ女子ノ専門教育ヲ施スベキ施設ナク、之ガ為メ從來高等女學校卒業生ニシテ上級學校ニ入學ヲ希望スルモノ概ネ東京・大阪等遠隔ノ地ニ遊學ス此ノ概數毎年四百名ヲ下ラズ、然ルニ戰災後子女ヲ斯ク遠隔地ニ學バスルコト父兄ノ憂慮スルコト言ヲ俟タズサレドモ教育ノコトタルヤ一日モ之ヲ忽ニスベカラズ依ツテ別府女學院ヲ設置シ、之ガ教養ノ機関トセントス、勿論内容ノ完成ヲ見次第専門學校令ニ依ル學校トシテ發足ヲ企図致シ居ルモ、入學期日ノ迫リ居ル折柄一応別府女學院トシテ之ガ設置認可ヲ申請スルモノナリ

あとで見る大分県知事による設置認可を視学官が了承していたと見られる文書には「昭和二十一年四月二十日附申請別府女学院設置ノ件」とあることから、上の理由書は創設者佐藤によって開校の前月４月の20日に提出されたものと言える。

その設置理由は「大分縣下ニハ女子ノ専門教育ヲ施スベキ施設ナク、之ガ為メ從來高等女學校卒業生ニシテ上級學校ニ入學ヲ希望スルモノ概ネ東京・大阪等遠隔ノ地ニ遊學ス此ノ概數毎年四百名ヲ下ラズ、然ルニ戰災後子女ヲ斯ク遠隔地ニ學バスルコト父兄ノ憂慮スルコト言ヲ俟タズ」と明白であった。また、「内容ノ完成ヲ見次第専門學校令ニ依ル學校トシテ發足ヲ企図致シ居ル」とあることから、創設者佐藤は本来、女子専門学校の設置を目指していたものと考えられる。し

かし「怱ニスベカラズ」「入學期日ノ迫リ居ル折柄一応別府女學院トシテ」設置申請を行ったのである。

それでは、大分県知事による設置認可を視学官が了承していたと見られる文書を見てみよう[11]。これは1946（昭和21）年4月30日のもので、

設立者佐藤義詮ヨリ別紙ノ通リ設立認可竝校長認可申請有之候處、右ハ専門学校令ニ基クモノトシテ設置ノ意思有之タルモ設立準備完了セザル為、暫定的措置トシテ一應各種学校トシテ認可致度、校舎トシテ別府市鶴見園ヲ昭和二十四年迄賃貸契約ヲナシ居リ、其ノ他ノ点ニ於テモ別ニ各種学校トシテ異存無之様被認候條、左案ニヨリ夫々認可施行相成可

とあり、「専門学校令ニ基クモノトシテ設置ノ意思有之タルモ設立準備完了セザル為」、別府女学院が「暫定的措置トシテ一應各種学校トシテ認可」されようとしたことが明白である。末尾の「左案」は、以下の「案之壱」「案ノ二」である[12]。

案之壱
指令教第一八七五號
別府女学院設立者
佐藤義詮
昭和二十一年四月二十日附申請別府女学院設置ノ件認可ス
昭和二十一年　月　日
知事

案ノ二
指令教第一八七五號
別府女学院設立者
佐藤義詮
昭和二十一年四月二十日附申請佐藤義詮ヲ校長ト定ムルノ件認可ス
年　月　日　知事

これら二案の日付が空欄であるが、もう一つ別の大分県知事によるものを視学官が了承していたと見られる「別府女學院位置変更ノ件」には「該女学院ハ昭和二十一年五月一日附ヲ以ッテ各種学校トシテ認可」とあることから、それら空欄を埋めた日付は1946（昭和21）年５月１日であったと考えられる[13]。

該女学院ハ昭和二十一年五月一日附ヲ以ッテ各種学校トシテ認可、別府市元鶴見園ヲ借受ケ授業シテ居リマシタ処、今回鶴見園ヲ占領軍ニ接収サレ変更ノヤムナキニ到リタルニ依リ、左案通リ指令交付シテモ差支アリマセン
案
指令教第九五一九號
年　月　日
別府女學院
昭和二十一年八月一日附申請位置変更ノ件認可する

昭和　　年　月　日

知事

別府市北石垣圓通寺八十二番地
元華北交通株式會社跡

これで、別府女学院が各種学校として認可されたのは1946（昭和21）年５月１日であったことが判ると同時に、すでに本稿の冒頭で見たように、その開校式が行なわれたのは「鶴見園」であったが、その後「新しく別府に占領軍の駐屯がきまって、その土地を追いたてられる羽目」となり「現在の北石垣の地に」移ったことも確かめられる。

最後に、創設者佐藤が大分県知事に別府女学院の廃校を届け出た文書を見ておこう[14]。

今般昭和廿二年三月卅一日附ヲ以テ別府女子専門學校認可ニ伴ヒ、別府女學院（昭和廿一年五月十五日大分縣知事認可）ノ生徒ハ第二學年ニ進級編入、尚別府女學院ノ資産及備品モ轉換使用致シマスコトニナリ、從ツテ別府女學院ハ廃校致シマスノデ御届ケ致シマス

昭和二十二年八月五日

別府女學院設立者　佐藤義詮

大分縣知事　細田德壽　殿

1947（昭和22）年８月５日付のもので、すでに「昭和廿二年三月卅一日附ヲ以テ別府女子専門學校」が認可され、その開設から４カ月が経っている頃のものである。

別府女学院の「生徒」は、のちの別府女子専門学校の「第二學年ニ進級編入」することとし、その「資産及備品モ轉換」して別府女子専門学校で「使用」することとした。こうして別府女学院は廃校を迎えたのである。なお、ここに「(昭和廿一年五月十五日大分縣知事認可)」とあるが、この「五月十五日」は恐らく誤記であり、正しくは本章で検証したように別府女学院の設置認可日は５月１日であったと判断される。

二　別府女学院で講義をしたと見られる教員たち

前章の最初では、創設者佐藤の設置理由書を見た。実は、この理由書には「初年度教授予定表」が添えられており[15]、同表では、担当科目、略歴、教授・兼任教授の区分、氏名の４点が明記されていた。表１の通りである。

表１　初年度教授予定表

担当科目	略歴	区分	氏名
倫理特別講義	文化学院大学部卒　豊州高女校長	校長	佐藤義詮
社会学 経済学	前大分経専教授　経済学士　京大卒	教授	正木一夫
国文学	元東洋大学教授　文学士	教授	勝峯晋風
外語　論理　心理	前神戸女学院大学部教授	教授	山川範子
外国語	京都帝大文科卒　文学士	教授	湯次了豊
社會経済思想史	京大教授　経済学博士	兼任教授	松岡孝児

法律	京大教授	兼任教授	大隅健一郎
国文学　哲学	大分経済専門学校教授　文学士	兼任教授	松本義一
法律	大分経済専門学校教授　法学士	兼任教授	草場勇
外国語	大分経済専門学校教授　文学士	兼任教授	石川重俊
自然科学	九州帝大卒　工学士	兼任教授	小川修
生理　衛生	元長崎医科大学講師　医学博士	兼任教授	辛島詢士▼
外国語文化史	立教大学文科卒　文学士	兼任教授	高山虔三▼
社会学	明治大学卒　法学士（高文行政）	兼任教授	渡辺美恵
家政　教育学	奈良女高師卒	兼任教授	和田幹枝
音楽体操	東京音楽学校卒	兼任教授	岡本利明

この表から、創設者佐藤をはじめ、教授4名、兼任教授11名の計16名の教授が予定されていたことが判る。とはいえ、これは言うまでもなく設置申請時のものであって、その認可後、別府女学院の開校以降に、皆が講義をしたとは言い難い。

そこで、別府女学院の文芸部が1946（昭和21）年10月に創刊した『あかでみあ』に「新生別府女學院」と題する一文があり、ここに「更に教授陣を散見すれば―」とあったので、その文章を同表に照らし合わせることで別府女学院において講義をしたと見られる教員を抽出してみることにした[16]。

> 更に教授陣を散見すれば―
>
> 〝佐藤校長〟文化學院時代より希臘詩の翻譯「希臘詩序説」の著述や、郷土史の書を著し文化人としてＡ級。（後略）
>
> 〝正木教授〟京大作田門下の俊才、加ふるに外語トップの獨語が彼の武器。同志社、大分高商と彼はリスト經濟と四ツに組んで一筋の道を貫き通した。（後略）
>
> 〝首藤教授〟疎開が利益を齎したものは、彼の如き優秀な學究を地方に置いてくれた事だ。東洋大學講師たりし彼の物理學は夙に別府有識青年の間に珍重がられてゐた。（後略）
>
> 〝尾渡教授〟文理大出の少壮英學者〝原田教授〟は最近判事さんとして轉出。―更に講師陣。
>
> 〝松本講師〟經專教授と言ふより二豊學會の松本先生と言つた方がよく通る。（後略）
>
> 同じく經專の〝草場教授〟の法律、〝富成教授〟の哲學、心理、〝石川教授〟の英語、東京「文學の家」同人〝中島講師〟の文學論、〝加藤講師〟の法律其の他數名の講師の外、特筆すべきは一流の文化人による特別講義である。最近此の學舎にチョークを取つた人に經專校長竹内良三郎、畫家佐藤敬、聲樂家佐藤美子、牧嗣人の諸氏を迎えたのは彼女等の非情な喜であつた。

「〝佐藤校長〟」「〝正木教授〟」「〝松本講師〟」「〝草場教授〟」「〝石川教授〟」は、表中の順に、佐藤義詮、正木一夫、松本義一、草場勇、石川重俊の５名と見られる[17]。

このうち、正木一夫は、別府女学院を経て、その後、別府女子専門学校で経済科主任教授を務めたが、1948（昭和23）年３月に関西大学へ転任することが発表されている。その転任は「経済科生徒には一大打撃」であったと伝えられている[18]。

また一人、石川重俊は、別府女学院入学者の宮本静が「最初の文化祭が終り、まだ余熱もさめぬ頃、英文学の主任教授であり、英語劇で「テムペスト」の数シーンを構成指導して下さった石川先生が仙台に行ってしまわれると知らされた」と回顧しており[19]、別府女子専門学校になって

から転任した正木とは違って、石川は早くも仙台方面へ転任したと考えられる。石川の後をうけたのは、佐瀬順夫である。佐瀬は、のちに「専任の石川重俊先生が転任されるので、その後をうけて別府女学院で英文学や英文学史を教えるお話を受けた」と述べている[20]。

さて、一文へ戻ってみよう。先に目を向けた５名以外にも「〝首藤教授〟」「〝尾渡教授〟」「〝原田教授〟」「〝富成教授〟」「〝中島講師〟」「〝加藤講師〟」とある。他方で、途中で転任した石川の後を佐瀬が継いでいる。さらに、昭和21年12月刊行の『あかでみあ』第１巻第２号には、その「著者紹介」に「折田　學氏　別府女學院教授」とある[21]。またさらに、都留長彦から昭和22年３月19日の消印日付で創設者佐藤あてに「10月から３月迄お世話様に相成りました」と書かれた手紙が届けられている[22]。

かれら首藤、尾渡、原田、富成、中島、加藤、佐瀬、折田、都留の９名は、いずれも先の表１には見られなかったが､別府女学院で講義をした教員らとして捉えることができる。この９名を、表２のように示してみた[23]。

「別府女学院で講義をした教員」と判断した時の参考資料を人物ごとに同表の右側に明記している。

『八十年史』には「昭和二一年当時、別府女学院の教員は、校長の佐藤義詮をはじめ、正木一夫・首藤基・尾渡達雄・原田芳雄らが教授として名を連らね、加藤柔郎・中島武之助ら専任講師の外に、大分経専から松本義一・草場勇・富成喜馬平・石川重俊らが来講していた」とある[24]。これを参考にした場合に□印を付けている。

また、●印は、２尾渡の「アカデーメイア」のように『あかでみあ』に本人の文章が掲載されている場合に付けている。さらに、４佐瀬にあるように、のちに別府女学院入学者がその人物を回顧している場合に☆印を付けている。他方、本人が当時を回顧している場合もある。それは５首藤にあるような場合で、◎や■の各印を付けている。６都留の※印は、先に触れた本人から創設者佐藤に宛てた手紙を指す。

こうして判断した表２の９名に、先に見た表１の佐藤、正木、松本、草場、石川の５名を加えれば、別府女学院で講義をした教員は、計14名を数えることができる。

反対に、「初年度教授予定表」で名を連ねたが、実際に講義をしたかどうかが判らない者には表１において網かけをした。勝峯晋風をはじめとする９名である。とはいえ、とりわけ勝峯と川島つゆの親交のことが知られている[25]。川島は別府大学の「国文学科の発展のために基礎づくりという大きな功績を残した」とされる[26]。遡ること別府女学院の設置申請時に勝峯の名があったことは注目に値する。

表２　初年度教授予定表に見られないが別府女学院で講義をした教員（氏名の五十音順）

	氏名	参考資料
1	折田学	●「もんぱるの」より（別府女学院教授、『あかでみあ』第１巻第２号、昭和21年12月）
2	尾渡達雄	●「アカデーメイア」（別府女学院文科教授　広島文理大、『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） 「〝尾渡教授〟、文理大出の少壮英学者」（『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） □「正木一夫・首藤基・尾渡達雄・原田芳雄ら」（佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、86頁）

3	加藤柔郎	●「男女平等」（別府女学院教授　別府市朝日青年団長、『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） 「〝加藤講師〟の法律」（『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） □「加藤柔郎・中島武之助ら」（佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、86頁）
4	佐瀬順夫	☆「石川先生、佐瀬先生―シェックスピアの「嵐」、「真夏の夜の夢」を習いました。」（井上伊津子（経済科）、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、23頁） ☆「ヂェスチャー入りの名訳をしてすばらしかった英語の佐瀬先生、尾渡先生」（田中美代子（英文科）、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、25頁） ◎「そのころをおもう」（『別府大学学長佐藤義詮先生　古稀記念論集』古稀記念編集委員会、昭和53年５月１日、19～23頁） ☆「石川先生の後任はやはり経専からの佐瀬先生であった。」（宮本静（野口）「きわめて個人的な回帰」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、157頁）
5	首藤基	「〝首藤教授〟疎開が利益を齎らしたものは、彼の如き優秀な学究を地方に置いてくれた事だ。東洋大学講師たりし彼の物理学は夙に別府有識青年の間に珍重がられてゐた。彼自作自慢のライターに、或ひは厳密なる計算のもとに極めて空気抵抗の少なく出来上がった彼自身の躰に、物理学者の片鱗が窺はれる。」（『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） ◎「女専開学への追憶」（『別府大学ニュース・アルゴノート』No.６開学20周年特集号、1966年） ■「草創の頃（座談会）」（三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、179～199頁） ☆「自習時間など決めてはなかったけれど、夜のひととき首藤先生を囲んで学んだドイツ語のレッスンの活発で楽しかったこと、中でも海のみえるベランダで悠遠な宇宙の謎を、生命の不思議を夜が更けるまで語ってくださった首藤先生。」（田中美代子（英文科）、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、25頁） ☆「相対性理論や量子力学の名講義で、次元の異う世界に思惟することを教えてくださった首藤基先生。」（成田淑恵「思い出」、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、172頁） □「正木一夫・首藤基・尾渡達雄・原田芳雄ら」（佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、86頁） ☆「物理学の首藤先生」（宮本静（野口）「きわめて個人的な回帰」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、157～158頁）
6	都留長彦	※「10月から３月迄お世話様に相成りましたが、家族を大勢養はねばならぬ窮状から不本意ながら貴学院を辞めさせて戴きます。」（昭和22年３月19日の消印日付による別府女学院々長あての手紙）
7	富成喜馬平	「〝富成教授〟の哲学、心理」（『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） □「松本義一・草場勇・富成喜馬平・石川重俊ら」（佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、86頁）

8	中島武之助	「〝中島講師〟の文學論」（『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） □「加藤柔郎・中島武之助ら」（佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、86頁） ☆「前同窓会会長成田様のお兄様でいらっしゃる中島武之助先生からは白樺派文学を」（中尾由子「佐藤義詮先生・女専創立の頃」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、54頁） ☆「いまひとつの空しい〝中断〟は」（宮本静（野口）「きわめて個人的な回帰」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、156頁）
9	原田芳雄	「最近判事さんとして転出」（『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月） □「正木一夫・首藤基・尾渡達雄・原田芳雄ら」（佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、86頁）

おなじ表１では、他方で▼印の付く辛島詢士と高山虔三の二人も見過ごせない。辛島も高山も、財団法人豊州高等女学校では理事を務めており[27]、後に別府女子専門学校や別府女子大学では教員として名を連ねている[28]。ところが、たしかに別府女学院の設置申請時には二人の名があったが、管見の限りでは、そこで実際に講義をしたのかどうかが不明である。両者を網かけにはしないものの敢えて▼印を付けて示すことにしたのは、二人がその後は教員であったという理由による。

最後に、本章の最初で紹介した「新生別府女學院」から以下の一文に目を向けておこう[29]。

> 特筆すべきは一流の文化人による特別講義である。最近此の學舎にチョークを取つた人に經専校長竹内良三郎、畫家佐藤敬、聲樂家佐藤美子、牧嗣人の諸氏を迎えたのは彼女等の非情な喜であつた。

佐藤敬画伯を迎えて特別講義も行われていた。例えば、別府女学院の教授であった首藤基も、のちに「勿論この外にも数多くの講座があった。例えば佐藤敬画伯のフランス美術論と云った具合で、全くびっくりする程学問的であった」と振り返っている[30]。「佐藤美子」「牧嗣人」など講座に招かれた「一流の文化人」が特別に講義を行っていたことも見落とせない。

三　別府女学院の入学者

本稿の冒頭で見た「三十年の回顧」には「生徒が二百名位授業を始めていた」とある。他方で、『ものがたり』では「大分合同新聞によれば、入学者は三科（国文科・英文科・社会科、各科定員四〇名）で一七〇名に及び」とある[31]。また他方で、開校５カ月後の、あの「新生別府女學院」には「若き百二十人の乙女等は」とあった。こうした数字の中には、たとえば『あかでみあ』を創刊した文芸部員８名や、前章で触れたような石川重俊の思い出を語り残した宮本静がいたと見られる。

『三十年』や『八十年史』、『七回忌記念』や『十回忌記念』には、別府女学院の入学者らが当時を回顧する一文が寄せられている。また、『ものがたり』においても同じく入学者らが当時を語っている。これらに加えて、『別府大学同窓会々員名簿』（以下では『名簿』と略す）に目をやると、1946（昭和21）年５月に別府女学院に入学し、翌1947（昭和22）年４月に新設の別府女子専門学校の第２学年へ進級編入し、1949（昭和24）年３月に同専門学校を卒業したと判断できる

者らを見つけることができる。こうして判る範囲で、表３に見られるような別府女学院入学者一覧を作成してみた。

特定することができた別府女学院入学者は、この表に示した通りで計18名である。

ただし、■印の付く三好のことは「別府女子高等女学校卒で別府女専に入学されましたが、家庭の都合により中途で退学されています」とある[32]。また、網かけの４名は、『名簿』にはなく回顧類なども見当たらず、その卒業が確認できない。この５名を除く残りの13名は、別府女学院を入学して後に別府女子専門学校を卒業したと判断できる。

表３　別府女学院入学者一覧

学科	氏名（当時）
英文	田中美代子、難波江静枝、野口静、安永静代
国文	竹中昌子、中尾由子、■三好國子
社会	上野照子、衛藤公子、高栄和子、中島淑恵、浜口昭代、丸山幸子、隅伊津子
	安部静江、梶原恵美子、上ノ内樹子、佐藤もと子

注：以下を参照して作成した。
・「別府女学院文芸部員」『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月。
・「別府女子専門学校の部」『別府大学同窓会々員名簿』1958年７月20日発行
・高栄和子「別府女子専門学校」、『別府大学ニュース・アルゴノート』No.６開学20周年特集号、1966年。
・「第一回卒業生の一人井上伊津子（隅）氏（経済科）に語って貰う。」、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、23～24頁。
・「さらに、田中美代子氏（英文科）は、次の様に語る。」、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、24～25頁。
・成田淑恵（中島）「思い出」、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、171～173頁。
・黒川静代（安永）「バクの回想」、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、173～174頁。
・「草創の頃（座談会）」、三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日、179～199頁。
・中尾由子「佐藤義詮先生・女専創立のころ」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、52～56頁。
・成田淑恵（中島）「ある回想を読み返して」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、131～136頁。
・宮本静（野口）「きわめて個人的な回帰」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、154～161頁。
・三好國子「あとがき」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生十回忌記念　真理と自由』平成９年３月30日、197～200頁。
・「女専第一期生成田淑恵さんの証言から」、飯沼賢司・山本晴樹『別府大学開学ものがたり』学校法人別府大学、令和３年12月18日、８～10頁。
・「三人の第一期生の人生と女専」、飯沼賢司・山本晴樹『別府大学開学ものがたり』学校法人別府大学、令和３年12月18日、12～14頁。

そのうち、高栄和子は、別府女学院の開校から数えて20年後の1966（昭和41）年に次のように述べている[33]。

昭和二十一年四月といいますと、終戦直後のことで、ほんとうに何もなかったことだけが事実で、物も心もすべてが生きているものから奪い去られ、逃げていったそんな感じの時でした。女子の上級学校といえば、まだ高等師範、女子専門学校といった時代、それも大分より外に出なければならなかった時代、それにもかかわらず、交通、食料、住宅のなかった時代、そんなとき、この学校が生まれたのでした。私どもは、ただなんでも高等女学校卒業者が行かれる学校が出来たと聞いて、その門をくぐりました。正直にいって、学校とは名のみで、どこに校舎があり、先生がいられるのか、皆目解りませんでした。それでも今の鶴見園で学校が始まりました。（後略）

集まった学生は、これまた種々雑多、女専中途の人、現地現役の人、引揚げの人、疎開して来た人、英語の猛烈に出来る人、又全然出来ない人それだけに面白い勉学の日々でした。（後略）

また、「大阪に生まれ、大阪で育った」中尾由子は、「福岡女専を受験し、宮崎に帰るべく、母と共に日豊線下りに乗車、別府駅でちょうど朝になりまして新聞を読」んだところで「日米合同の学校が別府に創立される」という記事を読んだと言う(34)。

さらに、同窓会長でもあった成田淑恵（表中、中島）は、以下のように「飛びあがるほどの朗報だった」と思い出している(35)。

本土まで迫った戦争のために進学を断念し、軍需工場で終戦を迎え、空しい廃墟の中に、女学校卒業の実力もない中途半端な学力のままにほおり出された私どもにとって、それはまさに飛びあがるほどの朗報だった。うれしくてまんじりともせぬ夜が続いたのを今もおぼえている。

この成田と同じように勤労労働に従事していたと見られる宮本静（表中、野口）は、「別府女学院の開校は一九四六年五月、このことが私達一期生にとってどんなに重要なことであったか…」と想起した上で「入れそうな学校が出来るらしい」と伝え聞くまでの間を、次のように書き残している(36)。

前年八月一五日の敗戦まで、私達の多くは動員学徒で、母校や家庭を離れ、それぞれ指定された地区の工場で働いていた。私は別府高女で福岡県の雑餉隈の九州兵器だった。しかも私達はその年三月が卒業年度で、現地ですでに仮卒業式があり、戦時ということで専攻科の名目で残され動員先で終戦となったのだった。だから、やっと学校にもどった時、これから専攻科生として、遅れた勉強をとり返すことができると信じていた。それがある日、―もう君達は卒業しているのだから―と、あっという間に母校からしめ出されてしまった。教室で担任の先生に告げられただけで、何のしめくくりの言葉もありはしなかった。

その後、同級生のMさんは、あちらで読書会がある、こちらで文化会があるとよく連れて行ってくれたが、近いうちに私達が入れそうな学校が出来るらしいと教えてくれたのも彼女だった。

こうして別府女学院入学者の回顧類へ目を向けると、高栄の述べる「種々雑多」は、別府女学院に集まった学生らを言い当てたものと解される。彼女の述懐からは、別府女学院が当時の「大分」の高等女学校卒業者の進学先の受け皿になったことが分かる。また、学徒動員で勤労労働に

従事していた時に終戦を迎えて行く先を迷う成田や宮本のような女学生の受け皿にもなった。さらには、宮崎へ向かう途中たまたま別府駅で目にした新聞記事を通じて、それは中尾にも用意されることになったのである。

おわりに

別府女学院は、専門学校であったのか。それとも、各種学校であったのか。その設置申請から認可を経て、途中で位置変更があり、それが廃校になるまでの過程が、具体的に明らかとなった。別府女学院は各種学校であった。まずは、そう言わなければならない。認可されたのは1946（昭和21）年５月１日で、開校式は同年５月15日であった[37]。この時は英文科、国文科、社会科が置かれ、のちに別府女子専門学校となってから国文科、英文科、経済科が置かれた[38]。

また、「疎開が利益を齎したものは」とあったように[39]、特定することのできた別府女学院の教員らには疎開中であったと見られる者もいて、それゆえ後に途中で転任していったと思われる場合もあった。とはいえ、のちの別府女子専門学校、さらに向こうの別府女子大学までを見渡してみるならば、創設者佐藤は言うまでもなく、そのほか松本義一、折田学、加藤柔郎、佐瀬順夫、首藤基の面々のように、別府女学院の時からずっと講義をしていた教員がいたというのも見えてくる[40]。

創設者佐藤の下に優れた教員らが参集して、1946（昭和46）年５月15日に鶴見園で開校式を迎えた別府女学院には、終戦後の「種々雑多」な境遇にあった「百二十人」とも「一七〇名」とも「二百名位」とも言い継がれる「乙女等」が方々より集い学んだ。なかには、その廃校後には、別府女子専門学校の第２学年へ進級編入し、1949（昭和24）年３月に同専門学校を卒業した者もいた。

「現在の北石垣の地」も「資産及備品」も教員も「生徒」も、別府女子専門学校へと受け継がれていたことが分かる。各種学校としての別府女学院の設置は、創設者佐藤が本来「發足ヲ企図」した別府女子専門学校の誕生を叶えるものであったと考えられる。

別府女学院が開校して数か月後、早くも仙台方面へ転任した石川重俊は、四半世紀ぶりに北石垣の地を訪ねた。その後『季刊 別府大学』Vol.２ No.２（1970.71冬季号）に石川が寄せた書簡には、次のようにあった[41]。

> あの当時、佐藤さん（と呼ぶことを、今ここで許して下さい）を中心に、共々語らって、女専進発と、そのヴィジョンを描いた者たちの夢が、いまこうして実現している偉大な歴史的現実を眼の前にした時、それは、当然すぎる程のことであると思った（後略）

別府女学院を知る石川の眼には、それから「四半世紀」後の別府大学の姿が、そのように映ったのである。

▼印を付けた辛島詢士と高山虔三の二人の位置づけや、講座に招かれて特別に講義を行った「一流の文化人」のこと[42]、さらに目を向ける先を広げるならば別府女子専門学校の意義など明らかにするべき残されている課題は多い。

日本近現代高等教育史研究の第一人者である天野郁夫は『新制大学の誕生』の下巻で、そのエピローグを直前にして別府大学の前身である別府女子大学の例を取り上げている[43]。そこで「貧しい女子専門学校のごく短い歴史の上に、多くの困難を抱えて出発した」と述べている。天野は、別府女子大学を例に、新制大学のボトムラインともいうべきものと、その実態を見ようとし、「専

門学校から「昇格」を果たした多くの新制大学にとって、設置認可は「大学としての出発」ではなく、「大学への出発」にすぎなかったと見るべきだろう」と結んでいる。ならば、本稿は、その出発前の準備段階に当たるところへ光を当てたものと位置づけられる。さらに向こうの別府女子大学の誕生までを視野に入れて、引きつづき関係の研究を進めていきたい。

注

（1）三十周年記念誌編集委員会編『別府大学の三十年』（佐藤学園・別府大学、昭和53年３月20日）、１～６頁。
（2）佐藤学園八十年記念誌編纂委員会編『学校法人佐藤学園の八十年』学校法人佐藤学園、昭和62年９月、17～20頁。
（3）佐藤瑠威「建学の精神と別府大学文学部の歴史―別府大学70周年によせて―」、別府大学紀要委員会編『別府大学紀要』第62号（別府大学会、2021年２月）、ⅰ～ⅷ頁。
（4）山本晴樹「一枚の絵―別府大学と文化学院をつなぐもの―」、別府大学研究出版委員会編『別府大学紀要』第50号（別府大学会、2009年２月）。
（5）仲嶺真信「別府大学建学の精神「VERITAS LIBERAT」―ロゴデザインの変遷及び累蹟「円通」との関わり―」、別府大学紀要委員会編『別府大学紀要』第62号（別府大学会、2021年２月）、xvii～xxx頁。
（6）今井航、甲斐敬之「別府大学の大学祭に関する一考察―石垣祭の開催回数のもつ意味・歴史的変遷を手がかりに―」、別府大学紀要委員会編『別府大学紀要』第58号（別府大学会、2017年２月）、147～158頁。
（7）飯沼賢司・山本晴樹『別府大学開学ものがたり』（学校法人別府大学、令和３年12月18日）、21～24頁。
（8）前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、86～88頁。
（9）共著者の吉岡義信は、1978（昭和53）年３月に別府大学史学科を卒業した。卒業後は、長年にわたって別府大学の職員を務めた。退職後は、別府大学同窓会の副会長を務めている。今から４年前の2019年頃から別府女子専門学校に関係する人物の調査を始めており、今も継続して進めている。
(10)「設置理由」、大分県公文書館所蔵。
(11)「別府女学院設置ノ件」、大分県公文書館所蔵。
(12) 前掲注（11）、「別府女学院設置ノ件」。
(13)「別府女學院位置変更ノ件」、大分県公文書館所蔵。
(14)「別府女學院廃校届」、大分県公文書館所蔵。
(15) 前掲注（10）、「設置理由」。
(16)「新生別府女學院」、『あかでみあ』第１巻第１号、昭和21年10月。引用では文中「畫家佐藤敬、聲樂家佐藤美子、牧嗣人」としたが、原文は「畫家佐藤敬聲樂家佐藤美子牧嗣人」である。読みやすくするために、引用文で２か所読点を加えた。
(17) 別府女学院入学者の中尾由子は「法学の草場先生」と回顧している（中尾由子「佐藤義詮先生・女専創立の頃」、佐藤義詮を偲ぶ会編『佐藤義詮先生七回忌記念文集』平成５年３月28日、55頁）。
(18)「正木教授　關西大學へ榮轉」、『別府女專新聞』第６号（昭和23年３月25日）。
(19) 宮本静（野口）「きわめて個人的な回帰」、前掲注（17）、『佐藤義詮先生七回忌記念文集』、155頁。
(20) 佐瀬順夫「そのころをおもう」、『別府大学学長佐藤義詮先生　古稀記念論集』（古稀記念編集委員会、昭和53年５月１日）、19頁。
(21)「著者紹介」、『あかでみあ』第１巻第２号、昭和21年12月。
(22) その手紙には「辞職願」が同封されていた。
(23) 別府女学院の教員は「教授として名を連らね」「専任講師の外に」「来講していた」といった表現で紹介されている（前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、86頁）。それで、別府女学院に来て講義をしていたと見られる教員まで含めて「別府女学院で講義をした教員」とした。
(24) 前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、86頁。
(25) 前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、108頁。
(26) 前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、108頁。
(27) 前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、84～85頁。
(28) 前掲注（2）、『学校法人佐藤学園の八十年』、92頁。

(29) 前掲注（16)、「新生別府女學院」。同注（16）と同じく引用文で２か所読点を加えた。
(30) 首藤基「女専開学への追憶」、『別府大学ニュース・アルゴノート』No.６（開学20周年特集号)、1966年。
(31) 前掲注（7)、『別府大学開学ものがたり』、12頁。
(32) 前掲注（7)、『別府大学開学ものがたり』、12頁。
(33) 高栄和子「別府女子専門学校」、前掲注（30)、『別府大学ニュース・アルゴノート』No.６（開学20周年特集号)。
(34) 中尾由子「佐藤義詮先生・女専創立のころ」、前掲注（17)、『佐藤義詮先生七回忌記念文集』（平成５年３月28日)、52頁。
(35) 成田淑恵（中島)「思い出」、前掲注（1)、『別府大学の三十年』、171頁。
(36) 宮本静（野口)「きわめて個人的な回帰」、前掲注（17)、『佐藤義詮先生七回忌記念文集』、154頁。
(37) 前掲注（7)、『別府大学開学ものがたり』、12頁。
(38)「別府女子専門学校学則」、前掲注（1)、『別府大学の三十年』、26〜32頁。
(39) 前掲注（16)、「新生別府女學院」。
(40) 別府女学院の教員であったと見られる都留長彦は、のちに別府女子大学の教員となったが（前掲注（2)、『学校法人佐藤学園の八十年』、105頁)、てまえ別府女子専門学校の教員であったかどうかが不明である。
(41)「石川重俊氏より学長への書簡」、『季刊 別府大学』Vol.２ No.２（1970.71冬季号)、49頁。
(42) 共著者の吉岡義信は、かつて「校歌（大学歌）は、「火の会」による別府講演が無ければ誕生しなかったことがわかる」と述べている。別府女子専門学校が認可された年、すなわち昭和22年の11月12日に「火の会」メンバーが別府公会堂で講演を行い、翌13日には同メンバーの萩須高徳や草野心平らが別府女子専門学校で講演を行った。吉岡は、このことを明らかにし、「火の会」による別府講演が草野心平作詞・宅孝二作曲の別府大学歌の誕生につながったことを論じている。同メンバーには「佐藤敬」「佐藤美子」もいたとされる（吉岡義信「「火の会」と校歌（大学歌）の誕生」『史学論叢』第42号（別府大学史学研究会、2012年３月)、66〜82頁)。
　「一流の文化人」との繋がりは、その後の別府女子専門学校の時にも続いたと見られる。
(43) 天野郁夫『新制大学の誕生　下』（名古屋大学出版会、2016年８月)、720〜722頁。